

101. ポストコロナ時代における高齢者施設の都市型農園を介した多主体交流創出に関する研究

千葉大学大学院工学研究院融合理工学府創成工学専攻建築学コース 助教 湯浅 かさね

概要

本研究は、高齢者施設に設けられた都市型農園「とらいふあーむ」（以下、TF と記載）を介して施設と地域のより多面的な関係性の構築につなげる方法論を検討し、実装することを目的として実施した。

まず、2024 年度は TF の活動に関与する多主体と共に、当該の都市型農園の活用に向けた空間改善について検討し、新規の設備等を導入した。加えて、高齢者施設職員への個別インタビュー調査、関連資料整理等により現状把握と分析を行った。2025 年度は、施設周辺住民約 4200 世帯を対象としたアンケート調査、高齢者施設職員へのフォーカスグループインタビューを実施するとともに、都市型農園という新たなケアの場での実践として大学生によるコーヒ振る舞いイベントを計 3 回実施した。

これらの調査及び実践から主に、①TF の活動への認知や参加意欲を高めるためにイベント開催が有効である、②TF は多主体連携や地域開放に有効といえる動線的特徴を有する、③施設周辺の住民が TF に求めるものは多世代との出会いと収穫や食に関する体験、介護や福祉に関する勉強会や相談会である、という 3 点を明らかにした。今後は、アクティビティ調査等により空間改善の効果の検証、地域のニーズを踏まえ TF を地域へ開く活動を段階的に行う計画の立案と実行、等が課題となる。

この度の研究・活動助成により、本研究の申請当初に挙げていた課題の解決へ向けて有用な空間へと近づけることができた。また、施設周辺住民へアンケートを全戸配布し、広く住民の意見を収集することができたことに加え、アンケートにより TF の認知度を高める副次的効果も得ることができた。

1. 背景および目的

地域包括ケアシステムの構築へ向け、地域に開かれたケアの場としての高齢者施設が増加している。施設を利用する高齢者自身の QOL だけでなく、介護に従事する職員の働きやすさ、ひいては地域の持続性を高める方策として期待されている。また、高齢者施設や社会福祉法人が地域のニーズに呼応し、制度や福祉の枠を超えて地域と共に取り組む「地域社会活動」の促進も提唱されて久しい。

しかし 2020 年春以降のコロナ禍により、全国の高齢者施設では感染防止のため長期に渡り面会や施設入所者（以下、入所者）の外出制限が余儀なくされた。また、入所者と家族の交流は分断され、入所者の社会活動は激減し（解決したい課題①）、それまで構築してきた高齢者施設と地域のつながりは希薄化した（解決したい課題②）。社会との接点が失われたことは高齢者施設に勤務する介護職員にとっても苦しいものであるという。かねてより介護の現場の人手不足や離職率の高さは社会的な問題であったが、利用者や家族とのコミュニケーションが大きく減ったことで専門職としての自尊心を維持・向上させることが困難な状況ともいえる（解決したい課題③）。

現在では、感染経路の遮断という観点と、つながりや交流が心身の健康に与える影響の観点の両方を含めて検討すべきであるといわれている。しかし、これまでのような屋内での面会や行事、多くの地域住民を招いてのイ

ベント等は制限すべき事項が多岐にわたる。そこで、従来の空間や方法に依らない、感染症リスク低減と交流を両立する新たな場および方法の検討が必要であると考えた。

本研究では、感染症リスク低減と交流を両立する新たな場として高齢者施設の屋外空間に着目した。具体的には、施設のテラスや庭の空間にプランターやファニチャーを設置した小規模な都市型農園を設け、そこを拠点とした高齢者と家族の面会、高齢者のケアやレクリエーション、地域住民との交流の機会等を創出した。

都市型農園の持つ多機能性は都市の貧困、フード砂漠、生物多様性等、様々な課題への取り組みとして世界各国の文脈で活用されてきた。加えて、コロナ禍を経た現在は身近な屋外活動の場としてその必要性は一層着目されているといえる。

これらの都市型農園の多面的価値を踏まえ、本研究では、都市型農園を介して高齢者施設と地域のより多面的な関係性の構築につなげる方法論を検討し、実装することを目的とした。研究の対象は申請者らがユニット型特別養護老人ホーム「とらいふ武蔵野」に2022年8月に設置し活動している都市型農園「とらいふあーむ（TF）」とした。

2. 方法

本研究は、個別インタビュー、フォーカスグループインタビュー、参与型観察、関連資料調査、アンケート調査、の手法を組み合わせ、以下の3つの枠組みで実施した。

A. コミュニケーションの視点「高齢者施設屋外での農的活動を介した多主体交流発生と各主体の心理」

ここでは、2022年8月のTF開設以降、現地に関与する多様な主体による交流発生とそれらの人々の心理について、個別インタビュー調査（2024年8月、11月）、関連資料分析、フォーカスグループインタビュー（2024年5月、2025年11月）、参与型観察（研究期間を通して随時）を行った。

個別インタビューについては、TFの企画段階から関与する施設職員2名を対象に実施した。TFの設置以降の利用状況、TF利用時のコミュニケーションの様子、地域との関係構築にあたっての方向性、等について実態および意識を把握した。フォーカスグループインタビューについては、2種類実施した。まず1つ目としてはTFの運営に関わる市民活動団体「クリーンむさしのを推進する会」（以下、クリーンむさしのと記載）を対象に、TFでの活動における空間の改善点について把握した。2つ目はこれまでTFの活動への関与が薄かった職員を対象に、TFに対する意識、TFへ関与することを可能にするポイント、要望、意見等について把握した。また、インタビュー等の内容を踏まえ空間改善を実施した。

B. 活動の継続性の視点「高齢者施設屋外の都市型農園の運営に関する多主体連携の実態の分析」

ここでは、TFの運営に関与している多主体の連携の実態について、関連資料分析、参与型観察、を行った。参与型観察については、主にTFの定期的な手入れ作業への参加、収穫イベントへの参加等と合わせて行った。

C. 地域への展開可能性の視点「高齢者施設屋外の都市型農園での活動が地域へ与える影響の分析」

ここでは、とらいふあーむの活動に関して、現地の空間の実測調査と、地域住民からの認知度および地域住民による評価やニーズについてアンケート調査を行った。方法はポスティングサービスを利用して、TFの近隣4220世帯にアンケート用紙を配布した。TFへ徒歩でアクセスできる範囲の住民の意識を把握することを目的に、配布範囲を設定した。回収方法は、2通り用意し、用紙に記載の二次元バーコードからWeb回答、または用紙に直接回答を書き込んだものをTFのある高齢者施設および近隣の公共施設に設置した回収ボックスに投函してもらうこととした。

3. 結果および考察

A. コミュニケーションの視点「高齢者施設屋外での農的活動を介した多主体交流発生と各主体の心理」

個別インタビューにより、TFの活動への認知や参加意向を高めるためにイベント開催が有効であることが把握されたことを踏まえ、TFの日常利用とイベント利用について整理する。TFは主に入所者、入所者家族、職員の日常利用を企図し開設された。2023年春からTFでの入所者とその家族の面会が増え、面会時に共に収穫を行うこともあるという。また、定期作業に入所者が参加し収穫等を行う様子、摂食嚥下機能に問題無い入所者は本

人が望めばその場で収穫物を食す様子も観察されている。デイサービス利用者は職員と共に TF での手入れ作業を行う他、歩行訓練や写生等の日常利用が見られる。一方、多くの職員の利用状況は業務の一環として TF での入所者介助、水やり等を臨時で手伝う、等にとどまる。収穫物は介護度の高い入所者が食べにくいものも多く、穫量の多い夏野菜等を中心に職員が自由に持ち帰ることができるよう提供されているという。しかし、生育過程や収穫に関与できないまま収穫物を持ち帰るのみでは、活動への参加動機に繋がりにくいと考えられる。ただ、園芸やものづくりが得意な職員が自主的に作業や環境整備に取り組む等 TF への愛着形成が示唆される動きも見られた。また、とらいふ武蔵野では入職希望者の面談時には必ず TF の見学を設けており、実際に TF の存在から入職を決めた職員も存在するという。

イベントのうち、植え付けや収穫等農的活動に関わるものは計 8 回開催された。特に、収穫時に野菜等に触れる体験とその収穫物を食す体験による五感への刺激は農的活動の醍醐味といえる。イベントの観察調査では入所者が積極的に土や野菜に触れる様子、収穫物にまつわる食体験を語る様子等が確認された。職員へのインタビュー調査でも、入所者の意欲的な様子や発話が増える様子を目の当たりにし、TF の効果を感じるという意見が聞かれた。

また、クリーンむさしののメンバーを対象としたフォーカスグループインタビューにより、空間の快適性向上や活動の幅を広げるために必要な空間改善について把握した。その内容に基づき、屋外用流し台及び作業台の新規購入と設置、屋外用電源の設置工事を行った（図 1）。また、TF の活動の様子を地域へ発信する一つの方法として、廃材等を活用した看板を作成、設置した（図 2）。更に、農園の中での居場所を創出するため人工芝エリアを設置したほか、日除けテントを新規購入（図 3）、設置した。



図 1. 屋外用洗い場・作業台設置の様子（2024 年 9 月筆者撮影）



図 2. 看板制作の様子（2024 年 9 月筆者撮影）



図 3. 日除けテント等による TF での居場所創出（2026 年 2 月筆者撮影）

施設職員を対象としたフォーカスグループインタビューについては、これまで TF への関与度の低かった職員 12 名を対象に 2 つのグループに分けて行った。内容の詳細についてはテキスト分析中であるが、主に、TF に現状関わる事ができていない理由の一つとして介護職の職員配置に関する課題があり TF の現地に入所者を介助して連れていくことが困難であること、イベントについては好意的に受け止められており施設内外の関係者がイベントを企画してくれればその実現に向けて最大限協力したい意向があること、TF に関する施設内での情報共有が不足しておりどのように関わる事ができるかわからない職員が多いこと、等が把握された。

B. 活動の継続性の視点「高齢者施設屋外の都市型農園の運営に関する多主体連携の実態の分析」

まず、TF に関する各主体の役割を整理する（図 4）。クリーンむさしののメンバーは毎週木曜日に TF を訪れ、2 時間程度の定期作業を行う。定期作業の主な内容は間引きや植え替え、収穫、堆肥作り、草取り等、野菜に関する知識や人手が必要な作業である。クリーンむさしののメンバーらは野菜栽培の経験と知識を有するため、活動開始当初は TF のアドバイザー的な役割だった。しかし企画段階から継続的に関与することで TF を自身たちの活動の場としても主体的に捉えていると考えられ、TF の在り方について職員らと意見交換する様子が高頻度

でみられる。職員らの役割は最も多く、水やり・害虫駆除等の日常的な手入れ、定期作業への参加、定期作業の活動日誌作成、TF のイベント企画、TF の活動を入所者家族や地域発信するための紙媒体の通信の作成と不定期発行、SNS での発信、等である。大学の研究室は、主に TF の全般に関する観察や記録、記録の分析と職員らへのフィードバック、都市型農園に関する最新情報収集と共有化等である。入所者やその家族は定期作業日以外にも天候や体調の良いタイミングで TF を訪れることができる。また、クリーンむさしのを介し TF の活動を知った地域住民 1 名が 2024 年 5 月から定期作業に参加し、毎週日曜日にも水やりと堆肥作りを担っている。

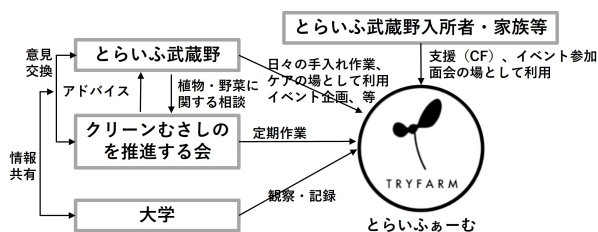


図 4. とらいふあーむ（TF）に関与する主体の関係・主な役割

次に、多主体による運営に関する課題を整理する。まず、TF の活動を主に行う職員は TF 企画発案者らを含む 4 名程度に限られ、その職員らも複数の業務を兼務している実態から一人あたりの負担が重くなっている現状がある。現在関与していない職員の中には、企画発案した職員のみが TF の活動を行うという認識を持つ者や、企画発案者以外の職員らが主体的に関与しにくい雰囲気を感じている者もいるようであるということがインタビュー調査から把握された。他の職員の中にも、TF の活動に理解や意欲を示す者も複数存在するが、自身の専門職としての業務に多くの稼働が割かれており、持続的な関与が困難な状態であるという。このような課題認識から、TF 発案者ら運営企画推進室では多くの職員が TF の活動に触れる機会創出を企図し、野菜の収穫ができるタイミングで職員らへの声掛けが行われたり、職員が施設内で収穫されたものを用いて職員向けに軽食をふるまったりと、活動共有の取り組みが行われている。

また、施設外への活動の共有化の点においては、紙媒体の通信の発行や SNS の発信を行っているものの、職員の業務上の負担が大きく高頻度での発信が難しいこと、外部への効果的な発信に関するノウハウやスキルが不足していることも課題として把握された。

C.地域への展開可能性の視点「高齢者施設屋外の都市型農園での活動が地域へ与える影響の分析」

TF の空間構成と動線を整理し、TF の特徴と課題、多主体関与と地域に開く際に重要と思われる点を考察する。

TF の空間構成を図 5 に示す（2024 年 5 月時点）。レイズドベッドが 14 台設置され、うち 3 台はデイサービス利用者が主に利用、管理している。職員により制作された 13 台のレイズドベッドの実寸は幅 185cm・奥行 77cm・高さ 73cm 程度（手作りのため数 cm の差あり）である。高さは、見本とした既製品（高さ 80cm）より 7cm 程度抑え、入所者の身長・車いす使用時の座高に合わせられている。入所者は腕の可動域が狭い、片麻痺がある等、個人により異なる状況を抱えているが、レイズドベッドの高さの工夫により無理のない範囲で土や野菜に触れられる様子が観察調査でも確認された。レイズドベッドの採用は入所者らの殆どが車いす使用であることを踏まえたものであるが、自力歩行できる入所者やデイサービス利用者、入所者を介助する介護士、更にクリーンむさしののメンバーにとっても身体的負担が少なく効果的に運用されている。一方で、高床のため土壌が乾燥しやすく、特に夏季の水やりは一日 3 回以上必要であり職員の負担となっている。但し、TF 以外でも農的活動を行うクリーンむさしのの視点では、レイズドベッドの水はけが良いという点は大雨の後に根腐れが起きず、利点として捉えられていることも把握された。更に、レイズドベッドはかなりの重量がある点、手作りのため耐久性に不安がある点から配置変更が容易でなく、空間構成上の課題を感じても対応が困難であるという課題が確認された。また、2023 年 6 月に保育園の園庭から見える位置に園児用の低いレイズドベッドが 2 台設置され、園児らが種まき、生育状態の観察、収穫を行っている。

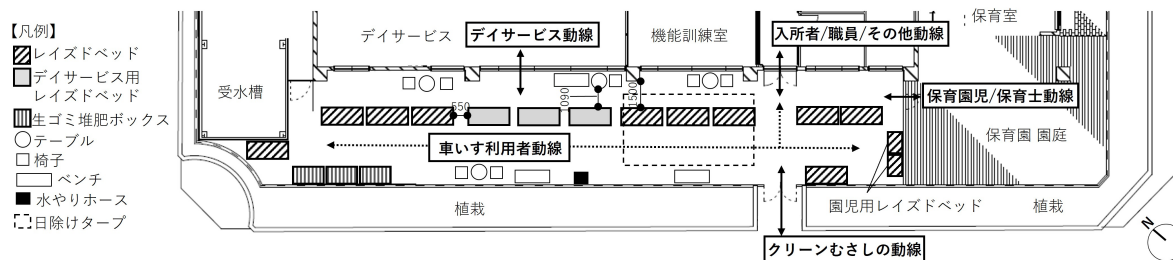


図 5. とらいふあーむ (TF) の空間構成と各主体の動線

高齢者と園児（乳幼児）というそれぞれの身体的特徴を踏まえた農的活動を実現するレイズドベッドを用いた空間は、他の主体にとっても身体的負荷が少ないものであり、多様な主体の関与が可能となる要素として重要と考えられる。レイズドベッド以外に、テーブル4台、1人掛け椅子7脚、ベンチ3台、生ゴミ堆肥ボックス3台（2023年2月2台設置、2024年1月1台追加）、水やりホース（2023年9月設置）があり、TFの運用開始後も必要に応じて段階的に空間が整備されている。なお、沿道からTFの様子が見通せるため、活動時に地域住民から声をかけられる機会が増えており、このことは地域に開かれたケアの場として重要な点といえる。

地域住民の意識を把握するアンケートについては、現在詳細分析中であるが主に以下の傾向が読み取れる。まず、地域交流の場としてのTFで出たい世代に関する質問については、多世代との出会いを求める回答が最も多くなった。また、TFでの体験として興味があるものについては、収穫や食に関する体験、更に、介護や福祉に関する勉強会や相談会へのニーズも高く、高齢者施設に設けられた場であることを活かした今後の活動の方向性が示唆された。

最後に、これらの調査分析を通して得られた知見を踏まえ、TFを地域に開いたケアの場として活用する一つの提案として、大学生によるコーヒー振る舞いイベントを企画、実践した(図6)。イベントは2025年11月、12月、2月の計3回実施し、施設入所者、デイサービス利用者、施設職員、クリーンむさしののメンバー、入所者家族、等、毎回50名弱が参加した。参加した介護職の職員からは「自分たちでレクリエーションを企画・実施できない(時間が捻出できない)ため、TFで企画をしてもらえてとても助かる」という声が上がった。また、施設入所者と家族の面会の場としてコーヒー振る舞いイベントへ参加するケースも複数あった。第2回のイベント時にはTFで収穫したさつまいもを使用したスイートポテトが振る舞われた。第3回のイベント時にはパン作りをしたい、という入所者の主体的な発案によりイベントの時間内に入所者らがパンを作りコーヒーと焼きたてのパンを楽しむ姿が見られた。参加者はケアする人、される人、という役割から離れ、共にコーヒーと会話を楽しむ時間が創出されており、TFという場が人と人(入所者、家族、地域、職員、等)がつながる場所として体感する機会が増えることで、施設のサービス理念(ナラティブ・ベイスド・ケア)の浸透に繋がっていくフェーズに入ることが予感されるものとなった。この取り組みは非常に参加者、施設職員等からの評価が高く、2026年度も継続的に実施することを予定している。



図6. 大学生によるコーヒー振る舞いイベントの様子（2025年11月筆者撮影）

（完）

発表論文

- 1) 大友翔太・湯浅かさね・柳澤要, 高齢者施設における農的空間の活用による多主体交流の創出に関する研究, 日本建築学会学術講演梗概集, 2025, 65-66